様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　5　月　22　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００７年度～２００８年度
課題番号：１９５３０８１８
研究課題名（和文）　日本の生活改善経験と途上国を結ぶ家庭科教育の創造

研究課題名（英文）CREATIVE HOMEMAKING EDUCATION BY LINKING JAPANESE HOME IMPROVEMENT EXPERIENCE WITH DEVELOPING NATIONS' HOME LIFE

研究代表者
柴　静子　(SHIBA SHIZUKO)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：９０１４１７７０

研究成果の概要：本研究では，歴史的，比較教育的に，家庭科教育の本質である生活改善の理念とその方法を再構築し，日本の生活改善の歴史を往還し，途上国と結ぶ家庭科教育理論と実践を創造することを目的とした。この趣旨に基づいて２つの授業を構築し，実践・評価して効果を検証した。また小・中・高等学校の家庭科カリキュラム上に，日本の生活改善の経験と途上国の生活援助とを結んだ教育内容を開発して位置づけた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	2,000,000	600,000	2,600,000
２００８年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：家庭科教育，生活改善経験，発展途上国，戦後，家庭科のカリキュラム

１．研究開始当初の背景

1947（昭和22）年３月，連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP)民間情報教育局（CIE）の指導と示唆を得て，文部省は民主的な家庭建設のための新教科，家庭科を誕生させた。申請者は，家庭科教育の発展をもたらした理念や実践の原点を占領期の教育改革の中に見いだすことができると考え，過去10年間にわたり，実証的な研究を行ってきた。この結果は，学位論文「占領下日本における高等学校家庭科教育成立過程の研究」（広島大学，平成15年）にまとめた。

この研究過程において，家庭科の成立に関するいくつかの重要な知見がもたらされた。その１つが，戦後日本の社会的要求をダイレクトに反映して，家庭生活における物的な改善とよき人間関係の形成がこの教科の成立時の目標として，最も重視されたということである。

この目標を達成するために，特に高等学

校の家庭科には，ホームプロジェクトや学校家庭クラブ，ユニットキッチンが導入され，家庭のみならず地域の生活が女子生徒の手で改善・向上されていった。それは，戦後の貧しく封建的な農山漁村の生活改善を目指して，1948年に制度化された生活改良普及員の成し遂げた仕事にきわめて類似していた。

これまでの生活改善運動に関する研究から，生活改良普及員の制度化と活動の実際，そして果たした役割が明らかにされているが，一方，これと並んで生活改善に取り組み，成果を上げた戦後家庭科については，これまで十分な研究が行なわれて来なかった。

さらに言えば，戦後日本の生活改善の体験は，餓えと貧困，非衛生に苦しんでいる途上国の開発援助の方向性に大きな示唆を与えることが指摘されている。佐藤寛氏（アジア経済研究所研究員）をチーフとする開発学研究グループは，現在の主要援助供与国の中で，日本は唯一，開発援助を受けた歴史をもつ国であったと認識し，この「途上国であった」歴史をもつドナーとして，日本は現在の途上国の開発援助，特に農村の改善のためにどのような貢献ができるのかを問い直そうとしている。そして，その１つの視角として，生活改良普及員の活動と類似していた，占領期から高度経済成長期以前の家庭科ホームプロジェクト，学校家庭クラブ，ユニットキッチンによる生活改善に着目し，これがもつ問題解決的学習方法と人間関係の構築方法を開発援助に取り込むことを提言している。

以上のように，国際協力の観点からも生活改善を目指した戦後の家庭科教育が注目されている今日，この教科の研究者として，なすべきことは何であろうか。

その１つは，敗戦後から高度経済成長期前後の家庭科における生活改善の理論と実際を歴史的に明らかにするとともに，途上国の生活状況やニーズを知り，家庭科教育の視点から，国際協力・支援のフィールドに有益な情報を与えることであろう。

２つめに，この点も含めて歴史的，比較教育的に家庭科教育の本質である生活改善の理念とその方法を再構築し，日本の生活改善の歴史を往還し，途上国と結ぶ家庭科教育理論と実践を創造することである。豊かな日常生活に埋没して，その中に潜む様々な問題があることを認識せず，またよき人間関係の価値に注意を払わない現代日本の青少年に，途上国の人々の生活の現状とどのような援助が可能であるのかを，家庭科を通して考えさせることにより，自らの生活と生き方を再考する教育上のブーメラン効果があると考えられる。

さらに３つめとして，日本人が敗戦後の劣悪な生活状況に置かれながらもその現実を直視し，暮らしを改善・向上させるためにどのように真摯に取り組んできたのか，そこにおいて家庭科教育はいかなる役割を果たしてきたのか，また今後，生活改善の理念を柱としたこの教科は自国や開発途上国に対してどのような可能性をもつのかという，歴史的・国際的な視野から家庭科教育理論を構築することである。

以上の背景から，２年間に渡る理論的・実証的研究を進めた。

２．研究の目的

本研究の目的は，１つに，申請者がこれまでに収集した生活改善に関する諸資料に加えて，全国に散逸している資料を新たに発掘し，整理・考察，集大成することによって，戦後の生活改善運動の実際や家庭科教育の寄与について，正鵠な歴史的事実を確定することである。そのための具体的手順としては，(1)家庭科教育・生活改善関係のGHQ/SCAP文書の調査と収集，(2)全国の生活改良普及員所蔵資料の調査と収集，(3)都道府県における家庭科ホームプロジェクト並びに学校家庭クラブの実践記録の収集，(4)家庭科教師や生活改良普及員の指針となった，CIE 教育映画やスライド脚本の収集を行うことである。

第２に，入手した諸資料を整理し，考察することによって，農林省生活改善課が展開した生活改善運動が，その後，日本にどのように定着したのか，そしてホームプロジェクト，学校家庭クラブ，ユニットキッチンを有した家庭科教育がこの運動とどのように関連したのかという点について明らかにすることである。

第３の目的は，日本の歴史を往還し，世界に貢献する家庭科教育を目指して，生活改善の歴史と開発途上国を結ぶ学習理論を構築し，これに基づいた授業を展開して，その効果を検証するとともに，実地授業，研究会，学会発表，出版物などを通して，新しい理論と実践を教育現場に普及することである。

３．研究の方法

先述の研究目的に従って，本研究では，まず全国に散逸しているところの生活改善運動の実際を把握することのできる個人文書，スライド，映画等の諸資料を収集し，さらにはこの運動を行政的に把握できるGHQ/SCAP文書の提供を国立国会図書館から受けて，この改善運動の実態を明らかにする。

また，ホームプロジェクト，学校家庭クラブ，ユニットキッチンを中心とした家庭科における生活改善の実際を示す諸資料を収集し，分析して，生活改良普及員が行

った改善とこの教科で生徒が実践した改善が一致していたことを証明する。

次いで，戦後日本の生活改善経験が途上国の生活改善援助に生かされていることを理解させ，家庭科の学習と途上国援助がつながることを実感させる単元を構想し，附属学校で実践する。実践結果を考察し，全国の家庭科教師（主に高等学校）が実践し易いように論文にまとめて提供する。

最後に，戦後日本の生活改善運動における家庭科の位置づけを明らかにしたうえで，途上国と結ぶ家庭科教育の理論化を図る。

４．研究成果

(1) 申請者が既に収集していた生活改善に関する諸資料に加えて，全国に散逸している資料を新たに発掘し，整理・考察，集大成することによって，戦後の生活改善運動の実際や家庭科教育の寄与について，歴史的事実を確定した。入手し，考察した主な資料は，①家庭科教育・生活改善関係の GHQ/SCAP 文書，②都道府県における家庭科ホームプロジェクト並びに学校家庭クラブの実践記録の収集，③家庭科教師や生活改良普及員の指針となった，CIE 教育映画（「ぼくらのゆめ」，「腰のまがる話」，「新しい保健所」，「わが街の出来事」，「農村の生活改善」）やその他の啓発映画（「緑の自転車」，「生活と水」，「明日をつくる人々」，「窓開く－一つの生活改善記録」，「若い村」）および生活改善のスライドと脚本（農山漁村文化協会）であった。

(2) 入手した諸資料を整理し，考察することによって，農林省生活改善課が展開した生活改善運動が，その後，日本にどのように定着したのか，そしてホームプロジェクト，学校家庭クラブ，ユニットキッチンを有した家庭科教育がこの運動とどのように関連したのかという点について明らかにした。農林省の生活改善施策は，山本松代らの強力なリーダーシップのもとで効果を上げていった。一方，高等学校の女子生徒が実施したホームプロジェクト，学校家庭クラブも家庭や地域の生活改善に貢献したことが実証されたが，この両者が連携をして生活改善を行ったという事実は1955年以前には見られなかった。また，ユニットキッチンについては，全国的な普及が見られ，理想的な台所のデモンストレーションとして成功したことが判明した。

(3) 以上を踏まえて，歴史を往還し，世界に貢献する家庭科教育を目指して，生活改善の歴史と開発途上国を結ぶ学習理論を構築し，これに基づいて２つ授業を展開した。

その１は，『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第 36 号(2008)に掲載した「発展途上国の子どもを理解し共感する家庭科保育領域の教材開発－絵本製作学習への組込みの可能性－」(柴静子，一ノ瀬孝恵，高橋美与子，日浦美智代，佐藤敦子，高田宏）である。

その２は，『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第 37 号(2009)に掲載した「『織りと衣が語る日本とカンボジアの女性たちのライフ・ストーリー』をテーマとした高等学校家庭科の授業構築」（柴静子，日浦美智代，高橋美与子，一ノ瀬孝恵，佐藤敦子，菅村亨，高田宏）である。

以下にこの２つの実践研究の概要を記す。

①「発展途上国の子どもを理解し共感する家庭科保育領域の教材開発－絵本製作学習への組込みの可能性－」

本研究では，乳幼児とのふれあい体験学習の一環として，戦後日本の子ども文化と現在の発展途上国の子ども文化とを繋いで考えさせるという新しい内容を導入することによって，時空と国境を越えて，絵本の普遍的価値への理解を促すことが可能になるという仮説を立てた。

カンボジアが端的な例だが，途上国の子どもたちは，保育や幼児教育の機会を充分に与えられておらず，また与えられているとしても，保育指導の理論・方法の欠如や保育環境上の問題から，成長発達を保証する質の高い教育を受けていない。このような事情は日本の敗戦直後との状況と極めて類似している。

日本のかつての経験と途上国の現在を繋ぐ学習をふれあい体験学習の中に位置づけようとする場合，どのように内容を構成すれば，日本文化の利点を理解し，また途上国の人々に共感して援助の気持ちをもつ将来の国際人の育成に寄与することができるのであろうか。

以上のような視角から，広島大学の２つの附属高等学校において，絵本を通して日本の文化と発展途上国の子どもを理解する授業を構築・実践し，検証した。

ここでは，一校のみの実践例を紹介する。広島大学附属高等学校では，質の高い絵本は日本の子どもたちのみならず，世界中の子どもたちによい影響を与えること，特に敗戦直後の日本と現在の途上国（カンボジア）を取りあげて，子どもたちへの絵本の効力について映像資料を用いて理解させる授業を行った。また，絵本作りの楽しさを絵本作家のストーリーや絵から学ばせることとし，ぬりえ絵本を用いて製作活動を行った。

この授業は，高等学校２年２組（男子 18

名，女子 22 名）を対象に，同高校の一ノ瀬孝恵教諭が行なった。実施期間は平成 19（2007)年 10 月 9 日～12 月 11 日であった。

指導計画としては，正規授業 10 時間に加えて，課外活動を行わせることとし，次のように単元を組み立てた。

第１次：子どもの誕生と成長・発達・２時間
第２次：子どもの遊びと児童文化財・２時間
第３次：絵本の効用と製作・・５時間＋課外
第４次：子どもの人権と福祉・・・　１時間

指導時間全 10 時間のうち，ここでは，国際理解の視点を組み込んだ，第３次「絵本の効用と絵本の製作」について，授業の概要を示す。

「絵本の効用と絵本の製作」の目標としては，①第二次世界大戦後の日本の絵本の普及活動を知り，絵本の効用を考える，②カンボジアの子どもたちの実情を知り，絵本が子どもたちに与える影響を考える，③今，私たちにできることは何かを考える，④班で協力してぬり絵絵本を製作することができるという４つを掲げた。

学習の流れについていえば，まず，絵本の思い出を数名の生徒に発表させ，絵本の効用について考えさせた。続いて，既成絵本「さっちゃんのまほうのて」,「もりたろうさんのじどうしゃ」「のろまなローラー」などを紹介しながら，絵本の領域を知らせた。

次に，第二次世界大戦直後の日本の子どもたちの保育環境と，現在の途上国の子どもたちの保育環境が類似しており，成長発達を保障する質の高い教育をうけていないという事情を生徒たちに知らせるために，日本の絵本の歴史を簡単に知らせ，次いで第二次世界大戦後の広島図書の児童文化発展への貢献を理解させた。

さらに昭和 25 年に製作・公開された教育映画「ぼくらのゆめ」を視聴させることで，戦後，日本の復興を子どもたちに託すべく質の高い教育を受けさせるため，学級文庫を作り，移動図書館を駆使し読み聞かせなどが行われていたことを理解させた。この授業は 11 月 27 日に１時間で実施した。

戦後日本の教育経験と現在のカンボジアの子ども文化に関する課題をつなぐ内容をぬりえ絵本製作学習に組み込んだことにより，以下のような効果が見られた。

①学習後のアンケート調査では，絵本製作学習が「大変楽しかった」と答えたのは, 34.2%,「楽しかった」は 57.9%,「普通だった」は 5.3%,「あまり楽しくなかった」は 0%,「楽しくなかった」は 2.6%であり，9 割の生徒がこの学習を楽しいものと受け止めていたことが示された。

②生徒の感想文に記された，絵本製作前後の気持ちの変化を次に示す。「最初は自分で一から作るのではなく，できた物から作るので，少し不満はあったが，その中でも自分らしさを出せたので良かった。」,「絵本は子ども向けで幼稚なものだと思ったが，作る中で作者なりの工夫や見せ方が複雑で洗練されているのに気づき，改めて，良くできたと思った。」,「製作前は大変そうだとしか思っていなかったが，製作するうちにどんどん楽しくなってもっとやりたいと思うようになった。子どもの気持ちに戻った気がした。」,「絵本製作がこれほどに楽しいものだとは思っていなかった。読むのも楽しいけれど，私たちが作ったものを見て楽しんでくれる人がいたら，もっとうれしいなと思う。」,「以前は，漠然とどうやったら楽しい絵本が作れるのか，と考えていた。作っていくうちに，子どもの立場に立って色や素材を考えられるようになり，子どもがよろこんでくれたらいいな，と思うようになった。機会があったらぜひ，子どもにも見てもらいたい。」,「製作前はとても楽しみだった。やっている途中は，1 枚の絵を完成させるのが思ったより大変で絵本製作の大変さを知った。終わって全てのページを見たときは達成感でいっぱいだった。」,「絵本は簡単な絵だし，作るのはとても易しいと思っていたけど，実際は簡単に見える絵や短い文の中にたくさんの意味が隠されていることが分かり，とても深いものだと思った。」,「ただの色塗りだと思ったけど，いろんな素材を使ったりして作る側も楽しい本になったと思う。絵本は子どもの考えをたくさん作る影響力のあるものだと思った。」,「いろいろな素材を使って作るのは予想以上に楽しかった。子どもが見て楽しいと思える絵本はなるべく多くの素材を使って見ても楽しめ，触っても楽しめるというものだと思った。淡い色を使ったほうが良いと思った。」,「製作する前から，楽しそうだと思っていた。作り終えると，自分のページにすごく愛着がわき，みんなで作ったこの本をカンボジアの子どもたちに送りたいと思った。」

名作絵本のぬりえに取り組ませることにより，簡単かつ短時間で自作絵本を完成させること，並びに絵本のもつ古今東西を問わない普遍的価値を理解させることを目標として，絵本製作学習の高度化を図った。生徒の感想文には，絵本というものの本質を捉えた記述が多く，さらには最後の文章が示すように，絵本を希求しているカンボジアの子どもたちに思いを馳せながら製作を進めた生徒も少なからずいた。ぬりえ絵本の製作とカンボジアでの図書館活動を通して，国の将来を担う子どもの育成には絵本が大きな力を発揮するということを生徒たちは学んだようである。

③「日本とカンボジアの子どもにとって，絵本の役割はどのように違うか」という質問に関して，生徒の多数は次の見解をもった。「私たちにとっては楽しむためのものであり，カンボジアの子どもたちにとっては文字を学べる教材となる。」，「日本では学力よりも感受性を意識されるが，カンボジアでは学校に通えない子どもが大勢いて絵本はそういう子どもたちにとっての教科書の役割を果たしている。」，「私たちにとっては想像力などを養うもので，カンボジアにとっては学校へ行くためのきっかけ作りとなる。」，「日本の子どもたちにとっては遊びの一つ。カンボジアの子どもにとっては，厳しい環境の中での数少ない娯楽。」，「カンボジアの子どもたちにとって，生きる糧である。」，「カンボジアの子どもたちにとっては外の世界を見るためにすごく大切なもの。」，「私たちにとっては当たり前のようにあるものだけれど，カンボジアの子どもたちにとっては癒しであったり，夢である。」，「日本では遊びの一つだが，カンボジアでは子どもたちの希望である。」

このように，多くの生徒は，日本では日常的に触れている絵本がカンボジアにおいては学校教育の不足を補う大切な文化財として取り扱われていることや，子どもたちの明日に生きる希望を生むものであることなどを理解した。今回の試みのように，復興途上の国にあって絵本を希求する子どもの姿を知らせることは，絵本のもつ普遍的な役割について共感をもって理解させるための方法として適切であると思われる。カンボジアに対して援助も含めて今後どのようにしたいかという問いには，次のように答える生徒が多かった。「実際にカンボジアに行ってこどもたちにふれあって，絵本を読んであげたり，読んでもらったりしたい。」，「絵本をもっと楽しめるようにカンボジアに文字を教えるための学校を開きたい。」，「手作り絵本は愛情もたくさん伝わってくるし，カンボジアのような貧しい国でも作れるので，私が作った本を届けてあげたい。」，「カンボジアに絵本を寄附したい。」，「カンボジアのこどもたちに本の読み聞かせをしてあげたい。」，「日本の絵本に，その国の言語で書いたシールを貼り，プレゼントするという活動を続けたい。」

以上のように，カンボジアに対する共感が深まり，国際援助を草の根レベルで行うことへの意欲が高まったことにより，この度の絵本製作学習は，国際理解教育としても大きな可能性をもつことが示された。

②「『織りと衣が語る日本とカンボジアの女性たちのライフ・ストーリー』をテーマとした高等学校家庭科の授業構築」

日本の伝統的衣装である「きもの」が，行事以外では着られなくなり，洋服が衣生活の中心を占めている今日，きものの果たしてきた役割と価値を再認識し，未来に引き継ぐことは若い世代の課題であり，したがって家庭科においても適切な内容を開発し，学習させる必要がある。

さらには，かつての日本がそうであったように，糸を紡ぎ，布を織り，家族の衣類を作り，また布を売って収入を得ることは，織物の盛んな途上国，特に絹絣の名産地であるカンボジアにおいては女性の重要な仕事である。内戦で消滅しかけた絹絣の復興に努めている日本人，森本喜久男氏の活動と，そこで彼とともに働いているカンボジア女性のライフ・ストーリーを取りあげて国際理解教育を行なうことも視野に入れたい。

以上のような考えから，これらの課題をリンクさせた高等学校家庭科授業を構想して，その効果を確かめた。

授業は次のように組み立てた。まず日本人の衣生活の変遷を糸，布，きものなどの具体物を通して知らせた。次に，きものと深く関わってきた日本女性のライフ・ストーリーを教師側で作成した。その際に，カンボジアで絹絣を復興させようとしている森本氏の活動と，氏に協力して，織りの技術の復興を担っている現地女性のライフ・ストーリーを入れ込むように構成した。完成した日本とカンボジアの女性のストーリーを生徒の班数で区切り，班毎に担当のパートを決め，社会的背景やきものに関する用語などを調べさせた。日本とカンボジアの女性のライフ・ストーリーに加えて，生徒が調べた関連事項を記入させ，さらには彼女らの人生とかかわりの深い布（日本の絹・麻・木綿，カンボジアの絹）を貼らせた広用紙を作成させた。各班の代表者に，広用紙に記された内容について発表させた。

授業は，広島大学附属高等学校２年生１クラス及び同附属福山高等学校２年生２クラスを対象として実施したが，ここでは１校のみの実践を取りあげる。

2008 年 10 月 24 日から 11 月 18 日まで，附属高等学校で断続的に実施した実験的授業は，日浦美智代教諭が担当し，２年 2 組の 39 名(男子 20 名，女子 19 名)の生徒を対象としたものであった。

一連の授業の第１ステップでは，10 月 24 日（金）の第 6 時限の一部（14:20～15:10 のうちの 30 分程度）を使って，①授業の柱となる松田節子の ライフ・ストーリーを紹介した後，それを読ませ，次いで，② クラス（39 人）を 8 グループ編成した。その後，③節子の生活してきた時代背景を調べるために，グループごとに担当する年代を決定し，課外学習として調べ活動を行うように指示をした。

第２ステップは，10 月 31 日（金）の 6～7 時限（14:20～16:10）で，① 布クイズに 20 分，および②事前アンケートに 30 分を使用した。次いで，③ 課外学習において個人が調べてきた時代背景や関連用語についてグループ内で発表させ，節子のライフ・ストーリーに組み込む事項(時代背景)を選定させた。その後，④節子さんの思い出の着物のはぎれを模造紙に貼らせ，布についての解説を加筆させた。

この日の授業だけでは作業が完成しなかったため，11 月 11 日（火）の 6 時限の授業を使って，時代背景が記載され，思い出の布が貼られた節子のライフ・ストーリー模造紙を完成させた。第 3 ステップは，2008 年度の研究大会の 1 日目である 11 月 14 日（金）の 2 時限に実施した授業であり，完成した模造紙をもとに，班毎にライフ・ストーリーを発表させた。その後，近年，和服が着られなくなった理由や衣料品の廃棄の問題など，現代の衣生活の課題を考えさせた。最後に，生活文化は主体的につくりだすものであることを認識させた。第 4 ステップは，11 月１８日（火）の 5 時限に行った，この度の実験授業の事後評価である。布クイズに 20 分，およびアンケートに 30 分を充てた。

以上の実験授業は，日本とカンボジアの女性のライフ・ストーリーに織物・布・きものを織込んで，①学習領域の統合し，②生活文化の継承と創造をねらうとともに③途上国援助のあり方を考えさせるという考えで構想された。実施後，生徒へのアンケート調査を通して学習効果を測定した結果，男女の性差が顕著に出る内容であるという特徴を持つこと，そうではあるが，意欲・興味，理解の面で男女とも良好な反応を示したことが明らかになった。

以上の２つの授業実践の結果から，日本の生活改善の経験と途上国を結ぶ家庭科の授業構築は不可能ではないこと，むしろ多大な成果を得ることができる教育内容であることが実証された。

(4)小・中・高等学校の家庭科カリキュラムの中に，日本の生活改善の経験と途上国を結ぶことのできる教育内容を入れ込むことの可能性について検討し，学習指導案を試行的に作成した。例えば「途上国で生きる母子健康手帳」,「グァテマラの栄養教育」,「ケニアのかまどの改善」などである。これらはまだ授業化されてはいないが，日本のかつての経験が途上国の生活改善に役立っていることを示すことによって，家庭科の学習内容に興味をもたせるとともに，この教科を学ぶことの意味を深く理解させることが可能になると思われる。

研究成果の(1)と(2)が示すように，戦後の生活改善運動と高等学校家庭科教育は別々に発展したのではなく，車の両輪の如く関連をもって進展した。それゆえに途上国の生活改善援助に戦後の家庭科の経験を生かすことができるのではないか，更には，このような視点から家庭科の授業を構築することによって，物質的には豊かな日本で日常生活に埋没している生徒の世界観・人生観や授業観に変化をもたらすことができると考えた。この点は従来の家庭科教育研究では看過されてきたことであった。日本の戦後の生活改善体験と途上国援助とを結びつけることにより，新しい家庭科教育の創造が可能になったことは，研究成果の(3)と(4)が示しているとおりである。

本研究によって，家庭科は日常生活の些事を取りあげる生活技能重視の教科に過ぎないという無理解を排し，国際貢献にも繋がる現代的で有意義な教科として認識されることと思う。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

1. 柴静子，日浦美智代，高橋美与子，一ノ瀬孝恵，佐藤敦子，菅村亨，高田宏，「『織りと衣が語る日本とカンボジアの女性たちのライフ・ストーリー』をテーマとした高等学校家庭科の授業構築」,『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』,査読無,第 37 号, 2009,pp.259－268.
2. 柴静子，一ノ瀬孝恵，高橋美与子，日浦美智代，佐藤敦子，高田宏，「発展途上国の子どもを理解し共感する家庭科保育領域の教材開発－絵本製作学習への組込みの可能性－」,『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，査読無，第 36 号，2008,pp.11－20.

〔学会発表〕（計　０　件）

６．研究組織

(1)研究代表者
柴　静子　(SHIBA SHIZUKO)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：９０１４１７７０

(2)研究分担者

(3)連携研究者